二〇一〇年一一月一六日（参加者一四名）

沈む日に光を返す紅葉かな　せいじ
秋夕焼沈思のうちに消えにけり　〃
残照を仄かに宿す芒かな　〃
二つ三つ空家めきたる蟻地獄　〃
野良猫の我にまとはり冬ざるる　〃
乱心のごと山茶花の散り急ぐ　宏虎
主賓より祖父母着飾る七五三　〃
浮寝鳥夢の中身を覗きたし　〃
貫禄のしぶき白鳥着水す　〃
通過せし車にすがり行く落葉　うつぎ
おそろいのセーターを着て面映ゆし　〃
ゆくりなく寺苑の隅の返り花　〃
手に包むりんごの重さ遠汽笛　〃
里山にたなびく煙冬ざるる　ぽんこ
山門を額縁として夕紅葉　〃
対岸の五彩の紅葉花のごと　〃
湯冷めしてつもる話のなほ尽きず　有香
軒下に鉢物移す冬仕度　〃
大夕焼ボール捜しの背を染めて　〃
掌に御所柿一つ子規しのぶ　百合
新海苔の産地直送潮の香も　〃
ファッション誌小春の椅子を揺らしつつ　つくし
琉球の踊りも楽し文化の日　〃
降りしきる銀杏へ開く弥陀の門　菜々
襞ふかめ六甲連山冬に入る　〃
参道に名の木の紅葉競い会ふ　かれん
拝観の間に音もなく初しぐれ　〃
木の実落つ見上ぐる梢高きかな　明日香
白波と見まがふ乱舞冬鴎　こすもす
格子戸に賞の懸崖菊並ぶ　満天
この町を出でず古希なり木の葉髪　はく子
金鉱跡抱きし山も眠りけり　〃

定例句会みのる選

二〇一〇年一一月一六日（参加者一四名）